

〔米村邦臣作品集〕

定年田舎暮らし

（仮稿）

米村
邦臣

【目次】

序 プロローグ

《あのととき》

一、会社倒産

(1) 真夜中の電話

(2) 走馬灯

(3) 一番長い日

(4) 構造改革の現われ

《あれから》

二、伊豆への道のり

(1) 倒産ショック

(2) 立ち直り

(3) 土地探し

(4) 伊豆へ

(5) 縁・えにし

三、終の棲家の建設ものがたり

(1) 夢の設計プランできあがる

(2) 出会い系サイトを活用

(3) 建築士の決定

(4) 建築士とのコラボレーション (協働作業)

(5) 田舎暮らしへ背水の陣

(6) 天の時地の利人の和

(7) 完成までのみちのり

(8) 終の棲家が完成

《いま》

四、暮らし始めて

(1) 婦唱夫随

プロローグ

鳥の囀る声で目を覚ます。まだ薄暗い。もう少し眠っていようとまどろみ始める。しかしその幽なる時の流れも長くは続かない。朝の白さが輝きだし、突然光となつて窓から差し込む。「あーつ、間に合うかな」と屋根上にある物見台に急いで登っていく。

東の空の雲間を突いて相模湾から昇る太陽が朱色に染まっている。

思わず手を合わせる。

悠々たる時の流れに身を任せながら、自然の中に生きる、定年田舎暮らしの静かな朝のはじまりである。

平成十八年四月十五日伊豆の富戸で田舎暮らしを始めてから、6ヶ月が過ぎた。サラリーマン生活をやめて2年、そして、“あの時”から早くも5年が過ぎようとしている。

朝日が朧なる朱色からくつきりとした金色に輝きを増すにつれ、ふと頭によぎ

ったあの忌まわしい出来事の記憶がだんだんと鮮やかに甦ってくる。

《あの時》

一、会社倒産

(1) 真夜中の電話

「リリン、リリン、リリン」

それは、平成十三年十二月五日の深夜の電話から始まった。

「いままでなんとか再建させようと頑張ってきたが、もう限界だよ。これ以上は無理だ。あがけばあがくほど再生も難しくなる。君も営業の第一線で皆を引っ張ってくれていたので残念だろうが、ここは苦渋の決断が必要だ。明日民事再生法の申請をする。了解してくれ・・・」

K副社長独特のしわがれ声が、いつか悲痛なる呻き声に変わっていた。

「倒産ですか・・・」

突然の電話にそれ以上は言葉がでなかった。

「明日始発電車で出社してくれ」との言葉を最後に電話が切れた。

(2) 走馬灯

師走の夜のしじまの中に頭が冴えわたる。眠れるはずはない。ひとりベッドで悶々とする。後悔の念があとからあとから湧き上がってきた。

やはりだめだったか、しかし、なぜこうなってしまったのか、もつとはよく思い切った手を打っておけば倒産という最悪の事態は免れたはずなのに・・・。

海外進出がいけなかったのだろうか、それともホテル事業が足をひっぱったのだろうか、そうなればその尖兵として日夜努力したことがかえってマイナスになったのだろうか・・・。

いやそんなはずはない。やはり国内の不動産事業の失敗が致命傷なのだと、海外事業やホテル事業を推進してきた身としては自分の立場を弁護し、責任を国内

事業に転嫁するさもしい気持ちになる。

“会社人間”として青春をささげ、全生命をこの会社に注ぎ込んできた私の人生とはなんだったのだろうか。入社以来三十五年間のいろんな思い出が走馬灯のように浮かんできては消えていく。

二十二歳で入社して六年ちかくを九州で過ごし、さらに東京本社勤務を六年ほど経験し、そのあとロンドン・香港と海外事業にその尖兵となり企業戦士として駆けずり回った。無我夢中でガムシヤラに仕事に打ち込む。苦しくも楽しい時期であった。その甲斐あってか三十九歳で経理部長に抜擢され、絶頂の時期を迎える。しかし、得意な時期はそう長続きはしなかった。四十四歳で発病、入院生活を余儀なくされ、一転、人生は暗転する。トップランナーが一周遅れの最後尾を走るランナーとなってしまう、同輩や後輩がいつの間にか追い越していった。残念で仕方がなかったがしかしまだ先は長い。病氣も必然であり、若くして地獄を見たのはこれも天の配剤と、気持ちを切り替え、病氣と向き合う。

苦闘一〇年の時を経て、五十五歳で取締役就任した時には「自分で自分のこ

とをほめてやりたい」と、その嬉しさも格別であつた。国際事業副本部長から、一年前に営業本部長に就任する。民間営業のトップとして身を粉にして走り回る。二年目に入り、株価が五十円を割り込み、新しい仕事が取れない。何とかしなければと焦りにも似た気持ちで毎日を過ごしていたのである。ある程度の予想はしていたものの倒産が現実になるとうろたえてしまう。心は千路に乱れ考えはあちこちへと飛散する。

(3) 一番長い日

まんじりともせずベッドの上でうつろな時間を過ごし、夜明けを待つて始発電車で会社に向かう。十二月六日、「会社倒産の日」はかくして始まった。

その当時の取締役は十四名であつた。国土交通省出身の社長と日本道路公団出身の副社長の二名、両メイン銀行からは二人の副社長を含め四人、青木のプロパー育ちの取締役が八名の合計十四名である。その構成を見ると銀行管理下にあり、役所支援のもと経営再建途上にあることが伺える。青木のプロパー役員は先頭に

立って走り回る役割で決定権はほとんどなかった。どこかで密かに練り上げられた「民事再生法」にもとづく会社再生プランが臨時取締役会に付議された。しかし、じっくり討議している時間はなかった。マスコミが情報をキャッチし、早くもNHKはテレビニュースで当社の倒産情報を流し始めたのである。いつときの猶予も許されなかった。直ちに決議書がまわされ取締役全員の署名が揃った。決議書に署名することとは異例のことである。普段は「賛成・異議なし」との口頭による決議であるが事態が事態であり万全を期したのであろう。

すぐに手続きが始まった。マスコミに顔が知られていないという理由でK副社長と私が会社を代表し裁判所へ駆け込むこととなった。顧問弁護士と事務担当数人が付き添う。東京地方裁判所民事第二十部に民事再生法の申請書を提出する。担当係官による所定の審理が行われ、無事申請書が受理された。「民事再生法はまだ出来て間もない法律です。是非再生を成功させてください」との励ましの言葉がうれしかった。

ボストンバックに詰め込んできた現金で定められた費用を払い込む。倒産にも

準備金が必要であり、最低限度の金がなければ倒産も出来ないことを身をもつて知ることになった。このようにスムーズに事が運んだのも顧問弁護士の事前の根回しがあったためであろうが、万事金と根回しの世の中、何か割り切れない思いが頭を掠めた。

が、そんなことを思いめぐらしているゆとりはない。裁判所から兜町の証券取引所に直行する。社長以下会社の首脳陣が一堂に会して、株式市場の後場が引けてから、記者クラブでの正式発表である。最大の山場を迎える。

「青木建設が臨時記者会見をします」とアナウンスされるや建物内に雷鳴轟き稲妻が走った。「やつぱりそうか」「きたか」という感じで、用意された会見の部屋は黒山の人だかり。記者やカメラマン、そのほかの関係者がごった返す異様な雰囲気の中、社長以下会社の首脳陣が頭を下げた。カメラのフラッシュが炸裂する。NHKのカメラが回り始めた。

質疑応答が始まった。社長の甲高い声が心なしか震えてはいるものの、凛として答えている。会社倒産にあたり、「社員は悪くはない」と泣いて頭を下げたY証

券社長の涙の記者会見とは違い、冷静な対応が続いた。私も会社側の末席に連な
って集中する報道陣の視線に耐えた。長い時間だった。やっと終わった。

ほっと胸をなでおろし安堵感に似た気持ちで会場を出るとき、「会社を倒産させ
た割には平然としてますね」。一人の女性記者が言い放った言葉にグサリと胸を刺
された。真っ赤な血が滲み出たその傷は今でも癒えていない。

厳しい批判の矛先を体一杯に感じながら、社員集会が開かれる会社に戻ってい
く。

会場に着き、一緒に働いてきた多くの仲間の顔を見たたん、いままでの冷静
な頭が空っぽになり、一転、感情が堰を切ったかのごとく涙が滂沱として止まら
ない。再生法申請の準備が社内で密かに進んでいたとは知らずに、昨日の昨日ま
で、「会社は大丈夫だから得意先を回り新しい仕事をもらって来い」と、ハッパを
かけていた身には、なんとも説明できない事態である。「泣いてお詫び」では子供
と同じであるが、それ以上の方法も見つからない。ここでも社員の冷たい非難の
目を浴びながら、時が流れた。

社員からの質問や状況説明の要求が相次ぎ、反省、悔悟、お詫び、非難、不満、糾弾が渦巻いた。

しかし、悔やんでばかりもいられない、非難ばかりしても事態は解決しない、なんとか前向きに考えようではないかというムードがすこしずつ芽生え始めてきた。

「とにかくこの会社が、この仲間が好きなんです」、「自分たちにできることはやっつけていこう」、「耐えるべきは耐えよう、忍ぶべきは忍ぼうではないか」……。時間がたつにつれ、社員の思いは強くなる。願望が希望に変わり確信がやがて信念に変わる。

「再生するかしないかは社員ひとりひとりの強い気持ちにかかっている」との顧問弁護士の強力な一言で皆の心が一つになった。

「再生へむけて頑張ろう」と感動のうちに社員集会が終わりを告げた。時計の針はまもなく日が変わる時刻を指し示していた。

こうして、私にとって「人生で一番長かった日」が過ぎていったのである。

(4) 構造改革の現われ

この日の夕方のテレビで、感想を聞かれた小泉首相はニコニコ笑い顔で「構造改革の現われです」と胸を張って答えていた。

倒産の衝撃に打ちひしがれて多くの人が悲嘆にくれているというのに、その心も知らずに・・・

日経夕刊はトップに掲載していた。わが社はまだトップを飾るほどのニュース価値がある会社だったのか、まだまだ腐っても鯛だなど、複雑な気持ちで夕刊各紙を読み漁った。

二、伊豆への道のり

〈1〉倒産ショック

“あの時”から五年、小泉首相から安倍政権へと時代が移った。構造改革を標榜して「自民党をぶっ壊す」とした小泉改革とはなんだったのだろうか。

市場原理主義にのつとつた競争社会は実力主義の旗印のもと、自由で活力ある社会を作り上げたが、一方で弱肉強食、格差拡大、勝ち組負け組のはっきりした殺伐とした世の中になってしまった。情や心が切り捨てられ、お金がすべて、手段を選ばず、勝てば官軍の、なにか空恐ろしい世の中になった気がしているのは、会社が倒産し「負け組」とみなされる者のひがみにすぎないのだろうか。

債権者や関係各位の温かい支援のもと、再生の道筋ができた六カ月後の平成十四年六月に私は取締役を退任した。五十八歳と三カ月になっていた。そのあと銀行管理下となった資産処分会社で働き、六十歳になったときに定年退職扱いとなり、三十八年間のサラリーマン生活に終わりを告げた。

年金のもらえる六十二歳まではもちろん、六十五歳ぐらいまでは働けるかもしれないとかすかに期待していたのだが、六十歳での早期退職となってしまったようなものである。

定年退職の日には職場の同僚や後輩から花束をもらい「ハッピーリタイアメント」と万歳三唱することが長い間の夢であった。そして皆に感謝しながら、いそ

いそと妻の待つ家に帰って「ありがとう」を言おうと・・・

しかし現実には厳しく寂しいもの。「倒産」という事実が重くのしかかり、なんの因果かと、一人むなしく家路に急いだ。

(2) 立ち直り

しかし、ものは考えようである。

人生八十年時代を迎えたいま、定年からの人生が二十年近くも待ち受けている。いやもつとかもしれない。この永い時間をどう生きるかで今までの人生の評価も変わってくるだろう。いや、これまでの人生はリハーサルでしかない。これからが人生の本番である。決して残された時間で余った人生ではなく、藤本義一が『六十歳からは好きなように生きよう』に書いている、「与えられた生、“与生”」と考えて、前向きに積極的に生きたいものである。

会社倒産を機に〈与生〉をどう生きるかと模索し始めて、二つの言葉を考えていた。

一つは七つのKの語呂合わせである。

《健康で心豊かに輝いてに而今を生きよう感謝感激》である。

もう一つは「四Sライフ」である。

《Simpleに、SlowではあるがSteadyに、そしてSincereなライフ》

定年後の人生をこの言葉をモットーに自分の好きなように生きよう、それには「悠々自適な電脳的田舎暮らし」しかない。そこで、かねてあこがれていた田舎暮らしという夢の実現に早速取りかかった。

・・・・田舎暮らし後半へ続く・・・・